道教信仰と死者の救済

小南一郎

中国中世の思想史・精神史の流れの中において、道教信仰は、それに先立つ神仙思想を受け継ぎつつも、神仙思想が相い対していた問題を、別の方向から、より深く凝視することによって、新しい精神の地平を切り開いていったのだと言うことができるであろう。例えば道教信仰が、人々の罪に目を注ぎ、罪びとたちの死後の運命に考察を加えたことも、神仙説の段階ではそうした関心は十分には成長しておらず、道教信仰がもたらした重要な精神史上の展開であったと言うことができる。

すなわち、神仙思想がひたすら高いものを追い求め、人間の持つ能力を十全に開発し、さらには人間的な限界をも突破して絶対者の位置にまで迫ろうとする方向に精神を集中させた結果、人間の行なう悪事については〝功過格〟的な思考以上に出なかったのに対して、道教は、三張道教の〝首過〟（自己の罪過の告白）の行事、あるいは「太平経」の〝承負〟の観念などに見られるように、その初期の段階から人間性の暗い面にも目を注ぎ、そこからの救済の道を探索していたのである。人間を等し並みに規定した性善・性悪といった議論に止まらず、個別的な一人ひとりの人間の罪とそれに対する応報、さらにはその罪からの救済に目を注ごうとしたところに、中国人の精神史の展開の中において、道教信仰（思想）が占

めた位置の重要さを見ることができるであろう。

道教が人々の罪やその応報としての死後の運命に大きな関心を寄せたことは、その教理にも反映されて、多くの地獄に関する道典が生み出されている。しかしそうした関心の強さは、単なる理論の体系としての教理の中のものであるに止まらず、より端的には、罪からの解放と死者の救済を願って、道士と信者たちとによって集団的に行なわれる〝斎〟などの儀礼実修の中に示されていると言えよう。唐の孟安排「道教義枢」巻二は、人々の救済のための儀式として十種類の斎の名を挙げている。その中のいくつかを抜き書きすれば、次のようである。(1)

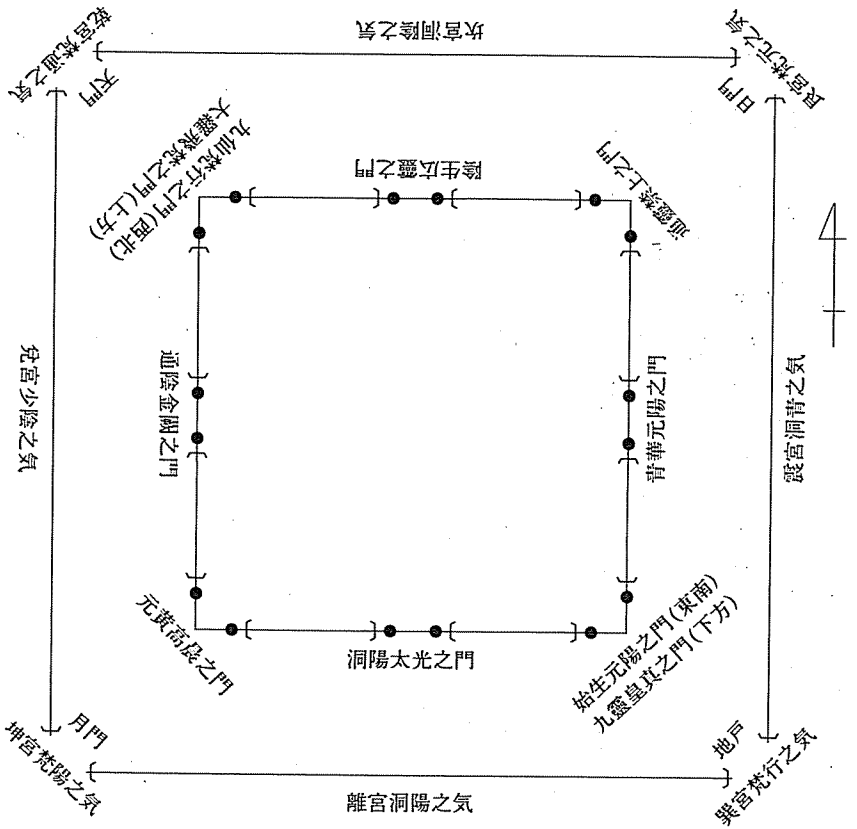
済度については、「経」によれば、三つの籙と七つの品とがあるとされる。

三つの籙というのは、第一が金籙斎で、かみ天災を消し、帝王を保鎮するもの。第二は玉籙斎で、人民たちを救済し、福を請い過ちを謝罪するもの。第三は黄籙斎で、しも地獄・九玄の苦しみから救いだすもの。七つの品というのは、第一は三皇斎で、仙を求め国を保つもの……第五は塗炭斎で、過ちを悔い寿命を求めるもの。第六は明真斎で、九幽の中にある魂を救い出すもの。第七は三元斎で、三官（天・地・水の神々の役所）に対する罪を謝するものである。

この中には、金籙斎のように帝王を保鎮するとされたり、三皇斎のように仙を求め国を保つといった、天下国家に関係しようとするものもありはするが、しかしその内の半数は自からの罪を謝し、また九玄・九幽の冥府にいる者（主として祖先の魂）を救い出そうとしてなされるものであった。

ここに名を挙げられた斎の多くについては、北周の「無上秘要」にその儀礼の詳細なシナリオが保存されている。その中でも特に、先祖たちの霊魂を冥府から救い出すために行なわれる黄籙斎について、「無上秘要」巻五四、黄籙斎品の記述を要約して次に紹介してみよう。

儀式に先立って、まず庭の中央に四角い壇が設けられる。その中央の、二丈四尺の区画の四方および四隅と上下の方位（上方は西北隅、下方は東南隅に当てられる）とに十の門を設ける。更にその外側の三丈二尺の方形区画の四隅に、天門・地戸・日門・月門の四つの門が定められ



図一　黄籙斎のための壇

る。それぞれの門には、東方の「青華元陽の門」等々の榜がつけられる。図一を参照。

十の方位に対し、それぞれそれぞれ九つづつの燈がともされる。そのほか太歳の星がある方向など、特別にある方向の門に燈の数が増されることもある。燈は一晩中（儀式は夜を徹して行なわれる）消えることがないように気を付ける。

門ごとに香が焚かれ、これも立ち消えにならないように気を付ける。香は〝神気〟を招くためのものである。

上質の金でもって竜を十個作り、十方の鎮めとし、罪魂の救出に用いる（金の竜は、天上に使者を遣わす際に、駅伝の馬となるのだという）。それぞれの方向にその竜を一つづつ置く。

主人（儀式の施主）は、〝本命〟の紋繒を用意する。国王や公主ならば紫色のきぬであるが、庶民はそれぞれの年命のつながる方向の色（すなわち五行に配当された、生まれ年の色）のものを用いる。これを中央に置く。

十方のそれぞれの方向にあたる色の紋繒を信（ささげもの）として用意し、それぞれの方向に置く。長夜の中（冥府）にある魂を救出するのに用いるのである。（紋繒は、飛天神人がそれを持って天君のもとに行き、それを奉納して地獄開放の命令書を得て来るのだとされる）。

準備が全て終わると、法師一人に依頼して、壇の中央で儀式を執り行なうようにたのみ、また信者の中から四人を選び、それぞれに儀式の中での役割が振り当てられる。

法師は、地戸の門から壇に登り、その中央において左に巡りながら〝上香〟（日本のお焼香のような動作か）を行なう。弟子たちも地戸から中に入ると、外側の区画の門の所で、左にめぐりながらそれぞれの方向に三度づつ上香をする。

法師は、中央にあって二十四たび叩歯（歯をカチカチと鳴らす）をしたあと祝辞（のりと）をのべ、太上十方の正真の気が自分の体内に入り、この儀式の場に仙官たちが来臨するようにと請う。

つづいて法師と弟子たちとはいっしょに左にめぐりながら、十方に対し三度づつの上香の礼を行なう。最初のひとめぐりが終わると、法師の言葉に合わせて〔その場のものみなが〕次のような祝辞をとなえる。(2)

第一の上香は、同法（同じ道教徒）の某甲（施主の名）の為に、その九祖の父母が九幽玉置長夜の府より救出され、死者の魂の悪対（悪の報い？）と宿身（身につもった）の罪根とが、この功徳もて除き去られんこと〔を祈るもの〕。斎をもうけて香を焚き、十方〔の神々〕に請謝すらくは、どうか九祖の父母が幽苦（地獄の苦しみ）より救出され、天堂に昇らんことを。いまここに香を焚き、身も心もささげて大道に帰命したてまつります。臣等は四体を地に投じて太上の三尊に帰命し、この功徳が九祖の父母に及ぶことによって、十苦・八難・長夜の中にある肉体

から離脱することを得て、光明を目にすることができ、天堂に昇り、衣食は自然にそなわり、長く無為の境遇に身を置くことができますよう願いたてまつります。いまここに香を焚き、自からを師尊と大聖衆と至真なる徳とにゆだねます。道を得ました後には、昇って無形の世界に入り、道と真を合一することができますように。

第二回目、第三回目の上香でも同様の祝辞が唱えられる。三めぐりの上香が終わると、ついで十方への謝罪が行なわれる。まず東方への謝罪から始まる。法師と弟子とがそろって東方に向かって九拝し、法師は深く跪いて次のように申しのべる。(3)

同法の某甲の九祖の父母は、世に在りし日に為したる大いなる悪行により、その罪は九幽長夜の府に結ぼおれ、魂は笞打ちに充てられ、種々の苦痛をあまねくなめ、形骸は損なわれ、苦毒は堪え難く、万劫にわたって沈淪し、天地の終わるまで救われることがありません。いま「盟真玉匱女青上宮抜度科品」の定めにより、青いあやぎぬ九十尺、或いは九尺、と金竜一つとを用意し、東方無極太上霊宝天尊・九気天君・東郷の諸霊官に帰命したてまつります。〔どうか〕某の家の九祖の父母の悪対と罪根とを抜き贖い、三界の司算（寿命を司どる神）と女青の上宮とは、罪録よりその名を削り去り、よるべなき魂を済度されて、身は光明に入り、天堂に昇って、衣食は自然に給され、すみやかに福慶ある家に転生できますように。甲（施主）〔もまた〕道を得て、その真を神々と合一させることができますように。

この唱えごとが終わると、青紋の繒（きぬ）の結び目を解き（死者の罪からの解放を象徴的に行なうのであろう）、九十回ずつ叩頭し頬を搏（う）つ。つづけて同様の拝謝と言上とが十方のそれぞれに向かってなされる。それが終わると、日君、月夫人、諸天星宿に対しても同様の儀式がなされ、さらに五岳のそれぞれに対してもそれがなされる。ただ五岳に対しては、それぞれの岳に付属する地獄があるとされ、上引の言上にいささか変形が加えられている。すなわち東岳の場合には、「同法の某甲の九祖の父母の、生前に行ないしところの元悪と醜逆とは、東岳泰山の神仙霊官

に触犯し、罪は九幽に結び、東岳に謫役せられ、泰山地獄の中に幽執せらる」と表現されており、南岳霍山、西岳華山、北岳恒山、中岳嵩山の場合も同様である。つづく水官への謝罪においても、死者は水官に〝謫役〟されていると表現されている。

他の斎の場合と同様に、この黄籙斎も同じ動作の際限のない繰り返しと、ほとんど変化のない唱えごとの繰り返しから成っている。参加者は極度の肉体的、精神的疲労に陥ったであろう。その極度の疲労をかけて、彼らは死者の救済を神々に祈ったのである。

この長い斎の儀礼の最後は〝三宝〟への謝罪である。ここまでの儀礼は、いささか観念化された要素も見えないではないが、中国土着の冥府観を基礎に置いて、それがいささか道教的に体系化されたものであった。ただ最後の〝三宝〟に対する儀礼の中には、仏教的な地獄に結びついた語彙がそのまま移入されている。その言上の中で次のように言うのである。「……願わくは、この功徳をもって九祖の罪魂を抜度し、三徒（三途）五苦の中、刀山剣樹、長河寒庭より去るを得しめ、身は幽夜を出で て光明に入り……。」

すでに引用した唱えごとの中に、死者は五岳や水官に〝謫役〟せられているとあり、また魏晋南北朝期に盛んに行なわれた地獄めぐりの物語りからも明らかなように、中国土着の冥府の観念に付随する冥府での苦しみという一項は、現実世界の役所における刑罰や苦役などのそのままの反映であった。しかるに最後の〝三宝〟への謝罪の部分には、超現実的な刀山や剣樹が出現している。道教的な三宝の観念自体が仏教の影響を受けたものであろうが、おそらく黄籙斎の最後の部分は、他の部分より少し下った時代に付加されたものと推定されよう。

以上に、死者たちの救済を目的とした黄籙斎の儀礼のあらすじを見てみた。このような、当時、実際に行なわれていたであろう道教的な儀式の細節を記したもの（すなわちそれに依りつつ行事が行なわれた規範書）のほかに、死者たちの地獄からの救済をより理論化して述べる、その成立は南北朝期にまで遡るであろう、一連の地獄関係の道典がある。それらの道典は、上述の黄籙斎など、斎

の儀礼と関係が深いのであるが、おそらくは、そうした斎の儀式が基礎となって地獄関係の道典は成立したのであって、理論化された経典が先にあって、それが斎の儀式を派生させたものではないであろう。

そうした古い地獄関係の道典の一つとして、「洞玄霊宝長夜之府九幽玉匱明真料」を挙げて、その内容の大略を次に見てみよう。この道典の冒頭部分は、明らかに仏典の形式を借りたものであって、次のような設定の場から始まる。

元始天尊は、あるとき、香林園中にあって、七千二百四十人の童子たちと倶にあった。元始天尊は、五色の光明を放ち、その光の中に、天上の長楽福堂にある人々の楽しげな様子と、十方無極世界の地獄にある人々の「裸身にして衣なく、頭と脚とに鎖械をつけ、足は刀山に立ち、身には鉄杖を負い……飢えては則ち炭を食らい、渇しては火精を飲む」といった苦難の様子がながめられた。

そのとき上智童子が稽首をして天尊に申し上げた、「いま諸大地獄の中の様子を目の当たりにして、心はおののき苦しみます。将来の人々も、同様に地獄へ落ちて、永劫の苦しみを受けるでありましょうが、彼らにはなぜ地獄に落ちることになったのかが分からないのであります。彼らに戒律（禁戒明真科律）を与えて、三塗（三途）をはなれ、天堂に昇れるようにしてやっていただきたく思います。」

元始天尊は、上智童子の言葉を善しとして、長夜の府（役所）の九幽玉匱（手文庫）の中に明真科律があって、それには罪福のこと、善悪の応報のことなどが詳しく説かれているので、それを人々に告げしらせ、遵守させるのがよい、と言う。天尊は、そこで十方飛天神人を召し寄せ、長夜の府の九幽玉匱を開いて明真科律を取り出して童子に手渡させた。

その「明真料」には、まず、「世にあって学を好み、色を棄て情を断ち、長斎持戒し、日夜経を誦して倦むことがなければ……白日飛行して、玉清天に昇れるであろう」等等の、十善因縁が説かれ、天上に昇るためになすべきこと十箇条が列挙されていて、これが明真科品の上牒となっている。それに続く、地獄に落ちる因縁のほうがより詳しくて、十四箇条からなる。その第一条を挙げ

れば、次のような内容である。[4]

明真科に言う、無極世界の男女の人々は、世に生きてあるときの行ないが、善を為すことは念わず、悪根ばかりを作り、師匠や主人を攻撃し、善人を悪口でおとし入れ、非道な殺害を行っている。生きとし生けるもののことを思いやらず、専ら残虐を行ない、密かに謀反の考えを懐き、自分より優れるものを嫉妬し、賢明なるものを押さえつけてしまう。死んだあとには悪の報いを受け、罪ある魂は拘束され、まっすぐ地獄の長夜の闇の中におちいる。そこで様々な苦痛が課せられ、その苦毒は堪え難い。万劫にわたってそうした苦しみを受けたあと、現世に生まれかわっても、非人（ちゃんとした人間の形をせぬもの）の境遇に生まれ、永遠に〝福〟への門を見失い、罪の塗（みち）に沈んで、いつまでも地獄との間を往復するばかりで、開度（すくわれ）ることなく、億劫までも、天堂とは無縁である。

この第一条にも見られるように、地獄への因縁となるのは、そのほとんどが世俗的な生活倫理に対する違反であって、別の条には邪神への淫祀や道法を軽んずることへの戒めはあるにしても、そこに日常性を越えた独自の宗教的な倫理の体系を見ることは困難である。

諸天童子たちは、以上のような十善因縁の十箇条と罪報の目録の十四箇条とを聴き、「一時に歓喜し作礼（さらい）して去っていった」。そこで太上道君が進み出ると、天尊に申し上げた、「今日、座に待って、天堂に昇る因縁や地獄に落ちる因縁となる善悪の行為の応報について、童子たちに伝授されますのを拝聴いたしましたが、すでに地獄中にある死魂を、そこから抜け出させ、光明の内に入らせて、福門に生まれかわらせることのできる功徳はないものでしょうか。」

この太上道君の請いに応じ、天尊は、飛天神人たちを集めて「罪福縁対抜度上品」を説いた。飛天神人がその「九幽玉匱抜度死魂罪対上品」を伝え、死者の救済のため、次のような儀礼を行なうようにと言う。[5]

常に、正月・三月・五月・七月・九月・十一月の、一年の内の六つの月、それに月の一日・八日・十四日・十五日・十八日・二十三日・二十四日・二十八

日・二十九日・三十日の、一月の内の十日、および八節の日、甲子の日、庚申の日には、家の庭の中央に高い燈明を置く。その高さは九尺で、一つの灯台に九つの燈明をともし、その明るい光が、上は九玄諸天の福堂を照らし、下は九地無極世界の長夜の中を照らすようにしつらえ、行事の規定に依り定めをよく守って儀式を執り行なう。

〔その行事に際しては〕最初に、天に向かって啓して請う、「天仙・地仙・真人・飛仙・日月星宿・九宮・五帝・五岳・三河・四海の兵馬、おのおの九億万騎と、三十二天の監斎直事・侍香金童・散華玉女・五帝直符、おのおの三十二人、それに伝言奏事の役目の飛竜騎吏たちが、すべてこの場に来臨し斎堂を見そなわしますように。香を献じて祈願いたしますところを、申します通りに天にお伝え下さいますように」と。これらの神々は、行道のことが終われば、みな天宮に帰ってゆく。

昼には香を焚き、夜には燈明をともして、香煙の絶えることがないようにする。経典を庭の中央の露天のもとに置き、九燈のもとで燈をめぐって行道を行なう。

上香して願いをこめ、それが終わると、次に東方に向かって九拝して言う、

「わたくし某甲は、いま、東方無極太上霊宝天尊・すでに道を得たる大聖衆・至真の諸君・丈人・九気天君、東郷の諸霊官に帰命したてまつります。いまここに斎を実施し、香を焚き燈をともしました。願わくはこの功徳を以って、諸天を照曜し、ひろく帝王・国主・君官民吏・道を受けたる法師・父母尊親・同学の門人・山林に隠居せる学真の道士・諸賢者・それに蠢飛蠕動し、蛇行蜎息する虫たちまで、一切の衆生が、みな十苦八難をまぬがれて、長く無為の中に居り、普度されて〝自然〟の中にありますように。わが家の億万の曽祖たちの囚われたる魂は、これを光明の中に釈放し、みな解脱を得しめ、罪根にかわって信根を懐き、五悪道を離れ、因縁から解放されて、死者は末長く安楽に、世にある者たちは皇恩をこうむり、天下は太平に、道徳の興隆せんこ

とを。いまここに香を焚き、自から師尊・大聖衆・至真の徳に帰依したてまつります。わたくし自身も、道を得たのちは、昇って無形の世界に入り、道と真を合一させることができますように。」

唱えごとが終われば、かぶりものを脱ぎ、叩頭し自からの頬を搏つこと、それぞれ八十一回。

以下、同様の儀礼を、南方・西方・北方・東北方・東南方・西南方・西北方の、あわせて十方に向かって行なう。最後に、飛天神人が言う、「定めに従ってこうした行事を行なえば、〝九幽〟は開かれ、長くそこに囚われていた死魂は、その身に光明を受けることとなる。もし行事に際し、疲労困憊して身体が動かなくなったときには、心をもって神々を拝すればよい」と。こうした注記は、これらの儀式が、元来、苦行としての性格を強く持っていたことを示唆するであろう。

以上のように、地獄に落ちないための科律と、すでに地獄に落ちている先祖の魂の救済の方法を述べてきた「九幽玉匱明真科」は、その最後に災害など国家にとっての不祥を除くための方法を説く。これも〝斎〟の方法を用いての救済である。

太上道君が天尊に申し上げた、「いま飛天神人の説く『罪福縁対抜度上品』を聴き、これまでの罪根から解放され、みな開度を得て、光明の中に入ることができることとなりましたが、しかし天には重なる災いがあり、国祚も不安定で、星座は乱れ、四気は常ならず、兵役や流行病が起り、帝王も安らかず、毒癘が流布して、天も人も死傷するとき、いかなる法によって、その災をはらい、不祥を除いたらよいのでしょう」と。

天尊は、飛天神人に命じて、「罪福縁対抜度上品」の内の、国土を災難から救う方法を、太上道君に対して詳しく説かせた。その方法は次のようである。

「霊宝真文」五篇を丹書して、中庭の五方に置かれた五つの案（つくえ）の上にのせ、それぞれの上に、上質の金一両で作った竜を鎮として置く。さらに五色の紋繪の信（ささげもの）によって、五帝の鎮（？）とする。災難をこうむっている者は、その年数に対応した紫文の繪をささげて、自からの命を抜度し、国祚を安泰ならしめ、天災を禳う。またその季節に対応した数（たとえば、春

ならば、東方に対応する数の九、もしくは九十、もしくは九百）の燈をともし、さらに中央には、九尺の高さの長燈に九つの燈明をともしたものを置く。

大法師が、中央で披頭散結（ざんばらがみ）して、訣に従って〝塗炭〟の礼[6]を行ない、六時の〝請謝〟を行なう。信徒たちも、門外にあって、同様に散髪して〝塗炭〟〝陳情〟を行なう。こうした行事は、それぞれの季節の数に応じた日数（春ならば九日九夜）続けられる。一連の行事が終わると、用いられた「真文」は焚やして煙となされる。

続いてこの儀式の細節が、飛天神人の言葉として述べられるが、最初に三度の上香があり、つづいて十方への拝礼が行なわれるなど、その基本的なシナリオは、他の〝斎〟の場合と変わらない。上香と拝礼に際しては、そのたびごとに願文が唱えられるが、この災害を禳うための願文も、基本的には死者の地獄からの救済を願う唱えごとにより、それに変形を加えたものと言えよう。たとえば東方への拝礼に際しては、次のように唱える。[7]

天地は否り激し、陰陽は相い刑い、四季は和を失ない、災害は広く起り、星座は乱れて、不祥を告げております。国土は擾乱し、兵乱と疫病とが流行し、帝王は憂い傷み、兆民の心も安らかではございません。謹んで大法に依り、真文を披露して、東方の無極太上霊宝天尊・すでに道を得たる大聖衆・至真の諸君・丈人・九気天君・東郷の諸霊官に帰依したてまつります。いまここに斎を実施し、心を披き形を露し、引求し自からを剋し、国の為に殃いを謝し、香を焚き燈をともして、諸天を照曜し、下は無極長夜の中の九幽の府を映して、その中にある者たちを光明の中に解放いたしたく思います。願わくはこの功徳を以って、帝王・国主・君官民吏のために、災を解き患を却け、日月星辰は正しい位置に復し、五行も常に順い、兵乱は止み病いも愈え、国祚は興隆し、兆民は懽び泰らかに、人も神も安らかならんことを。いまここに焼香をし、身をささげ心をささげて、師尊・大聖衆・至真の徳に帰命したてまつります。わたくし自身も、道を得ました後には、昇って無形の世界に入り、道と真を合一させることができ

ますように。

同様の唱えごとをして十方を拝し、それが終わると、三度ぐるぐる旋りながら「歩虚霊章」を誦する。最後に唱えごとをして香炉を覆い、この儀式は終わる。さらに、この「洞玄霊宝長夜之府九幽玉匱明真科」の経の場合にも、末尾に飛天神人が述べるいくつかの補足的な言葉があって終わるのである。

以上に見てきた、地獄からの救済を述べる道教経典の中でも古いものに属するであろう「九幽玉匱明真科」は、地獄に落ちぬための戒律を述べる部分と、すでに地獄にある先祖の魂を救済するための斎の細節を記した部分と、災害を禳うための斎について記した部分との、三つの部分から成っている。祖先の魂を救うための斎と、国家の安泰を祈る斎とが一連のものとなっているのは、我々の感覚からすれば、いささか木に竹を接いだように覚えるが、おそらく当時の概念からすれば、両者の結合には必然性があったものであろう。たとえば、南北朝後半期から隋唐期の仏像に付された造像銘に、この像一体は、国家の繁栄を祈り、皇帝と亡き父母の為に造ったと記されている場合が多い。あるいは敦煌写経の奥書きにも同様の趣旨が記されたものがある。具体的な例を一つだけ挙げれば、洛陽竜門の古陽洞にある恵感造像記（景明三年、五〇二）には次のように言う。[8]

景明三年五月卅日、比丘の恵感は、亡き父母のために、敬んで弥勒像一区（軀）を造る。願わくは国祚は永く隆んに、三宝のいよいよ顕かにして、曠劫いらいの師僧・父母眷属は、三塗を永く罪れ、福は鍾まりて競い集い、三有の（三界の中にある）群生は、咸な此の願いに同ぜんことを。

このように父母眷属の救いを祈る願文の中に、あわせて国家の安泰を祈願する句が入っているのは、恐らく、単に北朝の仏教の、国家守護のためのものという性格から強制的に挿入されたものというに止まらぬであろう。地獄関係の道典の各所で示唆されているように、救われておらぬ死者の魂の存在がこの世界に災厄をもたらすのであり、そうした魂が全て救われてはじめて地獄を含む全宇宙が清らかになると考えられていた。日本で言えば御霊信仰につながるような、たたりをなす死霊という古

い祖霊観念があって、それが死者の救済と災害の除去・国家の安泰という、いささか方向の異なる祈願を一つに結びつけていたものであろう。

以上に、死者の魂の救済のための黄籙斎の儀式と、そうした斎の儀式での実修を基礎にしつつ、日常生活の倫理を付加して作り上げられた地獄関係の道典の一例を見てみた。こうした道教側の文献を見てみて、まず第一に気が付くことは、地獄の責め苦をいう表現には、仏教徒が宣伝していたであろうものがそのまま取り入れられ（三塗・八難・十苦といった語彙の使用がその例）、道教独自の要素は多くはなかったことである。地獄の組織自体も、仏典「正法念処経」地獄品などに説かれるものに比較すれば、道教信仰における地獄は、まだ全く組織化が進んでいないように見える。死者の魂が〝九幽長夜の府〟にあるとされてはいても、その〝九幽〟は地下の九泉の観念に由来するもので、必ずしも具体的な九つの地獄が考えられていたわけではなく、そこが光明のない長夜の世界だというのも、道教成立以前にまで遡る、中国古来の死後の世界に関する一般的な観念を引き継いだものである。[9] 加えて、そうした一般的な冥府の観念が見えるほかに、また個別的な、五岳や水官に付属する冥府についても言及されている。ただそれらの地獄は、たとえば泰山の神仙霊官を触犯した者が泰山の地獄に囚えられているといった風に、それぞれが個別に死者を扱っているに過ぎない。様々な来歴を持つ冥府が唱えごとの中で並列されているばかりで、それらを一定の枠組や上下の関係の中で整理し組織化することはあまり進行していなかったのである。

すなわち南北朝期の道教徒たちにとって、地獄の道教的な組織化は、必ずしも強く求められるものではなかった。彼らの信仰にとっては、なお体系づけられぬままの冥府が個別的に存在することで十分であったようである。たとえば北斉武平七年（五七六）の「孟阿妃造像記」（図二）には、次のように言う。[10]

大齊の武平七年、歳は丁酉にあたり、二月甲辰朔のつきの廿三日丙寅のひに、清信弟子たる孟阿妃は、敬（つつし）んで忘夫（すなわち亡夫）の朱元洪および息子の敖、

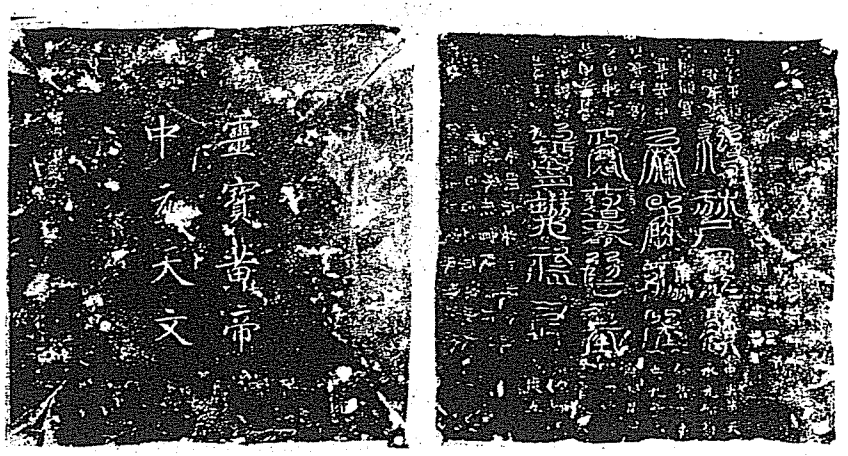
図二　孟阿妃造像記

（東京国立博物館所蔵拓本）

息子の推、息の白石、息の康奴、息女の夏姫らのために、敬んで老君像一区（軀）を造り、いま成就するを得たり。願わくは亡者は共に三塗を離れ、永く八難を超え、天堂に上昇して、道君に侍為せんことを。芒芒たる三界、蠢蠢たる四生は、同（とも）に苦門より出て、俱に上道に昇らんことを。

これは太上老君像のための造像記であり、死者たちが天に昇って老君のもとにあらんことを祈願するものであって、道教信仰にもとづいて造られたことは明らかであるが、死者たちは三塗・八苦の中にあるなどと、全体が仏教に起源する語彙と観念とで記述されている。身内の死者の魂の救済を祈る道教信徒たちにとって、冥府の全体的な性格や構造の如何はそれほど重大事ではなかった。彼らの関心はもっぱら、死者たちが冥府で苦しんでいるということと、彼らの罪がどのようにすれば贖われ、冥府から救出することができるかにあったと言えるであろう。死者たちは、特別の者でないかぎり、みな苦しみの待つ冥府に行くと考えられていた。そうした考えの基盤には、自からを含めて、全ての者が罪人であらざるをえない人間の〝生〟に対する深い反省があったと言えるであろう。

上述のような死者の救済の観念は、当然、葬送の儀礼にも反映する。道教的な葬送儀礼の中で用いられた遺物として、西安市南郊の龐留村の唐墓から出土した五つ一組みの鎮墓石を挙げることができる。この唐墓の墓主は、玄宗李隆基の第六女で、至徳二年（七五七）十月に死去し、



図三　唐清源県主墓鎮墓石

翌年二月に埋葬された。鎮墓石が五つから成るのは、四方と中央との五つの方位にそれぞれが対応し、各々の上にその対応する方位の〝天文〟が刻されているのである。東方に対応する「霊宝九気天文」は残欠しているので、西方に対応する「霊宝白帝七気天文」を例に挙げれば、それは次のような内容である。[11] 図三。

西方七気の素天は、元始〔天尊〕の符命を受け、西方無極世界土府神郷の諸霊官に告下す。いま清源県主（すなわち墓主の位階）ありて、五仙に滅度し、尸を太陰に托したり。いま咸寧県洪源郷の少陵原（墓地の所在地）において、宮を安んじ室を立て、形を后土に庇わる（埋葬をした）。明らかに正法に承け、安慰撫恤して、素霊は七気の素華もて哺飴し、精光を充溢せしめ、形骸を練飾して、骨は芳しく肉は香り、億劫まで不滅ならしめよ。西岳華山は、明らかに長夜九幽の府を開きて、清源県主の魂神を出だし、沐浴し冠帯せしめ、遷して天府に上らしめ、衣食を供給し、長く光明にあり、魔は干犯するなく、一切の神霊は侍衛して安鎮ならしめよ。「元始明真旧典

女青文」の如くせよ。

すなわちこの「天文」は、元始天尊の符命を承けて、西方七気天君の役所が、その配下の西方無極世界土府神郷の霊官たちに告下した命令書であって、墓主の魂を西岳華山の獄から釈放し、天府に遷して安楽な境遇が得られるよう、「元始明真旧典女青文」の規定の如く執行せよと命ずるものである。これ以外の方位の「天文」も基本的に同様の構成からなるので、その一々は示さず、表一にその概略だけを挙げた。

この鎮墓文は、実は道典「太上洞玄霊宝滅度五練生尸妙経」に説くところを実際に葬送儀礼の中で実行した際の遺物なのである。この「五練生尸妙経」は、天尊が、長楽舎の香林園中にあって、七千二百四十童子たちを教化したさいに説いたという形式で構成されている。その中に、五つの石刻の鎮墓文とほぼ同文の文句（もちろん墓主の名と埋葬地とは、某甲、某界とのみ記される）が示され、その施用の際の細節が記されている。東方に対する「霊宝青帝錬度五仙安霊鎮神九気天文」を挙げれば、次のようである。[12]

「東方九気青天は、元始の符命を承け、東方無極世界の土府神郷の諸霊官らに告下す。……（中間部分は、上引の鎮墓文と同じ）悉く元始盟真旧典女青文の如くせよ」。

この文を青石の上に黒書し、師は黄繒章を拝し、終われば、文を亡者の尸形の在るところの東むきの墓界の端に埋める。埋めるときに臨んで、師は雲行禹歩（特殊なステップ）九歩して、その在るところに至り、東に向きて大字（鳥虫書のような呪術的文字）及びこの文を読む。終われば、叩歯すること二十四通、気を嗘むこと九過して、呪して言う、

「元始の符命もて、普く東方無極世界の土府神郷・洞空・洞無・洞玄・洞元・九気の総司・三界の神官・一切の冥霊・無極神王に告ぐ。今日大慶にして、青天は始めて陽に、高駕は正しきに臨み、万の道は開通す。甲乙は度を受け、尸を玄房に託したり。太上清信（道教信者）の魂は、応に五仙に上升し、沐浴し払拭して衣装をつけ、形は霊岳に庇われ、地は為に開張すべし。請うらくは玉女を以って神宮（墓

室）を安鎮ならしめ、一切の神々が侍衛し、供給は自然にして、魂の尸に返るを須ちて、上帝の奉迎せられんことを。一に明真の旧典の如く施行せよ」と。

終われば、すなわち文を土中に埋めるのである。

この唐の皇族の女性の墓から出土した五つの鎮墓石も、ここに記されたような儀礼をもって墓中に収められたこと、疑いない。加えて言えば、唐の王朝が道教を崇拝したというのは、単に道教の教理が仏教との論争で優位に立ち、王朝によって公認されたというだけに止まらず、皇族の葬送儀礼が道教の儀典にもとづいて行なわれ、その魂の救済も道教の方式によって祈られるといったように、具体的な生活の種々相も道教によって規範づけられていたのである。

この鎮墓文（すなわち「五鍊生尸経」の天文）の中で注目すべきは、五岳のもとにある死者の魂がそこから釈放されたあと、西方と北方とでは〝天府〟に昇るとされているのに対し、東・南・中の三方では〝南宮〟に昇るとされていることである（表一を見よ）。この〝南宮〟は、仏教の天堂・地獄の組織には見られぬもので、中国の古くからの伝承的観念を受け継ぎつつ、道教が独自に育て上げた死者の魂の浄化の場所であったと推定される。

この南宮は、また南軒、南仙などとも呼ばれ、南方に位置する陽のエネルギーに溢れる場所で、それゆえ死者はそこに行って再生を得るのだとされたのであろうが、特にこの時代、後の述べる酆都の冥府の支配者が北帝と呼ばれ、北方に位置すると考えられていたのと対になるものであったのであろう。[13] 塗炭斎の願文にも次のようにある。[14]

願わくはこの功徳を以って、わが家の億曽万祖の父母、先に亡（なくな）りしもの後に死せしもの、亡父母らは、免れて憂苦を脱し、天堂に上昇し、福を南宮に分かち、帰身帰神して大道に帰命せんことを。

この願文では天堂と南宮とが並列されている。南宮については、特に「霊宝度人経」がしばしばこれに言及している。「霊宝無量度人上品妙経」巻一から二例だけ引用してみよう。[15]

道言う……上学の士、この経（度人経）を修誦すれば、みなただちに受度し、南宮に飛昇す。

	命令の発出者	命令の受け手	死者の魂の動き
元始天尊	東方九気青天	東方無極世界土府神郷	東嶽太山→南宮
	南方三気丹天	南方無極世界土府神郷	南嶽霍山→南宮
	中元皇天	中央九曇土府洞極神郷	中嶽嵩高→南宮
	西方七気素天	西方無極世界土府神郷	西嶽華山→天府
	北方五気玄天	北方無極世界土府神郷	北嶽恒山→天府

表一　東方部分は「五鍊生尸妙経」で補った。また「五鍊生尸妙経」は，南嶽を衡としている。

道言う、夫れ末学にして道浅きもの、或いは仙品のいまだ充たざるものは、運として応に滅度し、身は太陰を経べし。〔しかれども〕臨過（臨終、あるいは冥府で審判を受ける？）の時に同学の至人、その為に香をたき経を誦すること十過、以って尸形を度すること法の如ければ、魂神はただちに南宮に上り、其の学功に随い、日を計りて更正するを得て、転輪して滅せず、すなわち神仙たるを得ん。

この引用例からも知られるように、まだ道を得ていない死者は、南宮に上ったあと、さらにまた人間世界に再生し、いくども転輪する中で、やがて神仙としての資格を完成させると考えられていたのである。地獄から救出された祖先たちの霊魂も、一旦は天に上るが、そのまま永久にそこに止まるのではない。時間がくると人間世界に〝更生〟するとされている。「無上秘要」巻三九に引く「明真経」に言う。[16]

某甲はみずから大法を奉じ、天文を佩帯しております。……〔その功徳により〕七祖も福を同じくし、みな上昇するを得て、玄都の七宝林中に逍遙し、魂は錬度を受け、時がくれば更生（再生）することを得ますように。

このように死者の魂は天上界で〝錬度〟をうけたあと、再び〝更生〟するのである。三皇斎の唱えごとにも次のように言う。[17]

仰ぎて願わくは、皇君・上帝・至聖なる火神・天

神衆霊・領校の仙官よ、各々群司に告下し、檄もて職宰に命じ、みな臣等の啓奏を聴察して、某の家の七祖の父母および余の親族の亡魂を苦爽より遷拔せしむるを賜わらんことを。並びに乞らくは牢檻より解脱せしめ、徒繫より原放し、謫役を休息し、よく衆罰より離れしめ、各々福堂に還居するを得、優遊閑楽にして、子孫を佑利し、詞訟（裁判沙汰）は興らず、年満ち限畢りて、更に人中の富貴の家に生まれ、長く懽泰を保たしめよ。

このように地獄を脱した死者は再び人間世界に生まれかわるとされ、その際の生まれかわる先が富貴の家でありますようにという願文も、しばしば見る所である。

ちなみに上に述べた〝錬度〟と関連して、道教の修行者は、自からの〝錬身〟〝錬形〟のために、わざわざ冥府に入ることもあるという。「老子想爾注」の「没身不殆」の句に対する注に次のように言う。[18]

太陰は、道を積み形を練るの宮なり。世に処るべからざることあれば、賢者は避去し、死に託して太陰中を過り、復た一辺に生まる。没するに像て殆うからざるなり。俗人は善行を積むあたわず。死すれば便ち真の死にして、地官に屬し去るなり。

このように、世を避けた者が〝太陰〟に入って〝形（肉体）を練る〟ことがあると言う。「無上秘要」は、〝練身〟について、より詳しく述べている。[19]

若し其の人、或いは暫く死して太陰に適き、権に三官を過ぎれば、肉は既に灰爛し、血は沈み脈は散ずるも、猶お五蔵は自生し、白骨は玉の如し。七魄は営侍し、三魂は宅を守り、三元は歓息し、大神は内閉し、大乙は神を録し、司命は節を秉り、五老は華を扶け、帝君は質を宝（たも）つ。或いは三十年、二十年、あるいは十年、五年、随意にして出ず。当に生まれんとするの時、すなわち更に血を収め肉を育み、津を生じ液を結び、質を復して胎に反り、形を成して質を濯ぐ。乃ち昔の未だ死せざるの容に勝るなり。真人身を太陰に練し、貌を三官に易うとは、此の謂いなり。

すなわち真人は、一旦死んだという形を取って太陰・三官にゆき、そこで古い肉体が分解された後も、肉体の

本質的な部分と魂魄とが保存されて、任意の時期に再生することができる。しかも再生に際しては新しい肉体が備わって、過去のものよりずっと良くなると言うのである。この条が「無上秘要」戸解品に収められていることからも知られるように、戸解による升仙も、単に死んだふりをして世間の目をごまかし、この世からの脱出を容易にするだけではなく、実は死を経ることによって肉体が浄化されることに意味があったのだと言えよう。特に道教的な思考にあっては、肉体の浄めと精神の浄めとは不可分のものであったのである。

以上に見てきたように、斎などの儀式によって死者の救済を祈願しようとした道教信徒たちにとって、死者を冥府（地獄）から救出する方法と救済の過程については大きな関心があったのであろうが、冥府自体の構造については、さほど興味はなかったものと考えられる。二十四獄といった表現がすでにあったにしても、それは多数の地獄を二十四という成数で言ったまでで、その一つ一つに名を付け、それに具体的な内容を与えることは、一般の信者たちの信仰には必ずしも必要なものではなかった。道教的な地獄を組織化したのは、一般の道教信仰よりも宗教的な階層で少し上位に位置する人々であって、恐らくは仏教の詳細な地獄説に対抗しようとする意図をもっての企てであったのであろう。

そのようにして組織化された道教の地獄の体系の例をいくつか挙げてみよう。「三洞珠嚢」巻七の二十四地獄品には次のようにある。[20]

按ずるに「太真科」の中巻には次のように言っている――

宛利天の下に位置する酆都の山は、北方の癸の方角の地にあり、山の上には八つの地獄があって、かみの三官をつかさどっている。その第一は監天獄、第二は平天獄、第三は虚無獄、第四は自然獄、第五は九平獄、第六は清詔獄、第七は天玄獄、第八は元正獄である。〔酆都の山の〕中腹には八つの地獄があって、中の三官をつかさどっている。その第一は玄沙北獄、第二は皇天獄、第三は禁罰獄、第四は玄沙獄、第五は形正獄、第六は律令獄、第七は九天獄、

第八は清冷獄である。〔酆都の〕山の下には八つの地獄があって、しもの三官をつかさどっている。その第一は無量獄、第二は太真獄、第三は玄都獄、第四は四十九獄、第五は天一北獄、第六は河伯獄、第七は累劫獄、第八は女真獄である。

右の二十四獄には、獄ごとに十二掾吏と金頭鉄面の巨天力士が各々二千四百人おり、金槌と鉄杖とをもって、死者の魂に玄科を適用して〔玄科に対する違犯の〕罪に対し、罰を執行するのである。

この二十四獄は、それぞれの獄の名称から見ても、その大部分が観念的に作り上げられたものであることが知られよう。ただ酆都に死者が行くという観念は、古くからの来歴を持っている。葛洪「抱朴子」内篇対俗第三に見える〝羅酆〟がすなわち酆都のことだとされるが、葛洪がそれについて具体的にいかなるイメージや観念を懐いていたかは不明である。[21] この酆都山（羅酆山）の構造については陶弘景「真誥」巻十五闡微幽篇の記述が詳細である。[22]

羅酆山は北方の癸の地（すなわち大地の外側にひろがる四海のうち、北海海中の癸の方位）にある。山の高さは二千六百里、その周囲は三万里。その山の下（すなわち山の内部）に洞天があって、山の下部の周囲一万五千里の地を占める。山の上と山の下とには共に鬼神たちの宮室がある。〔すなわち〕山の上に六宮があり、洞天の中にも六宮があるのである。それぞれの〔宮の〕周囲はみな一千里。これが六天の鬼神たちの宮なのである。山上にあるのが外宮であり、洞天中にあるのが内宮であるが、その構造は同一である。

第一宮は紂絶陰天宮と名付けられる。以下順番に東につらなる。第二宮は泰煞諒事宗天宮と名付けられる。第三宮は明晨耐犯武城天宮と名付けられる。第四宮は恬昭罪気天宮と名付けられる。第五宮は宗霊七非天宮と名付けられる。第六宮は敢司連宛廈天宮と名付けられる。

おおよそ六天宮は、鬼神や六天たちの役所なのである。洞天中の六天宮も同名であって、その形態も同一である。

人は死んだあと、まずみな紂絶陰天宮中にゆき、〔そこで死後の〕仕事をおおせつかる。あるいはまず名山や泰山、江河に行く者もあって、ただちに第一天に行くとは限らない。〔ただ〕死後の職務を授けられる時と善悪の行為の罪の裁きを受ける時だけは、必ずこの第一天宮に来なければならない。

泰煞諒事宗天宮諸煞鬼は第二天である。突然に死亡した者は、ここも経過せねばならない。（注によれば、急な死亡であると文書に誤りがある可能性があり、まずここで〝検問〟を受けるのである）。

賢人や聖者が死亡すると、まず明晨第三宮を通って任務を授けられる。

禍福吉凶や続命（寿命を延ばすこと）や罪害のことについては、恬昭第四天宮があつかう。鬼官地斗君がこの中に役所を置いている。鬼神の元締なのである。

「真誥」は、このように羅酆山の鬼神の宮室の組織を説明し、さら歴史上の有名人物を多数挙げて、彼らがいまこの六天宮のどこにいるかを述べている。同じ酆都＝羅酆なのであるが、上に挙げた「三洞珠嚢」の二十四獄とはその内部構造が全く異なっていることが知られよう。

ちなみに「真誥」同篇に記述する、善人の死後の運命は次のようなものである。[23]

至忠、至孝の人が死ぬと、みな辞令を授かって地下主者となる。一百四十年がたってはじめて下仙の教えを受けることとなり、大道が伝授される。それから段々に進んで、仙官に補せられるようになる。百四十年に一度、試みを受けて昇進することが許されるのである。

ここでは、死者たちは昇任試験（信心を試みる実地試験であろう）を受けて仙階を昇ってゆくことになっている。知識人たちが考え出した死後の世界であったにちがいない。

死者たちがおもむく羅酆都は、六朝隋唐時期には、大地の外側をとりまく大海中という神話的な空間に位置するとされており、また「真誥」が記す六天宮のむつかしい命名からも知られるように、観念的な面が強く表面に

出ていた。しかしやがて四川省の、三峡の険の上流に位置する酆都県が酆都地獄の地だとされ、その地にまつわる地獄信仰や説話が近世に盛行することになる。そうした近世の民間信仰の中での酆都地獄の種々相については、沢田瑞穂『地獄変――中国の冥界説――』[24]に多くの材料が集められており、この小論が扱おうとする時代からも外れるので、ここでは特に言及することはしない。

「三洞珠嚢」からもう一つ、巻七の三十二牢獄に関する記述を引いてみよう[25]。

按ずるに「趙文和伝」には次のように言う。

三天曹門下の獄、北極司録門下の獄、北辰主命門下の獄、将軍太歳門下の獄、太蔭太陽門下の獄、司空土府門下の獄、五部土公門下の獄、宅中真官門下の獄、諸寒温竈君門下の獄、東岳太山東門下の獄、南岳衡山南門下の獄、西岳華山西門下の獄、北岳恒山北門下の獄、中央嵩山中門下の獄、二十八宿三十五宮中門下の獄、雲中三十六魁門下の獄、河伯九江水帝門下の獄、十二河平候中帝門下の獄、北帝鹹河門下の獄、北酆二十四獄門下の獄、社稷府君門下の獄、川神府廟門下の獄、流殃刑禱三栗門下の獄、十二刑禱門下の獄、大耗小耗中官門下の獄、三丘五墓十二塚訴刑殺門下の獄、拘形破殺中官門下の獄、正王簡十二曹中門下の獄、延命生算門下の獄、十二月建中門下の獄、十二禁忌門下の獄、十耆中官法曹門下の獄

ここに列挙された三十二獄も、恐らくそれぞれの来歴はさまざまであって、前述の二十四獄べればちゃんとした伝承を持ったものが多いようではあるが、そのいくつかは観念的に作り出され、三十二という成数に合わせるためにここに集合させられたものであろう。これら三十二獄が全て〝門下の獄〟と呼ばれているのは、人間たちの生と死とをつかさどる役所のそれぞれに牢獄が付属していると考えられたからだと考えられる。また酆都山の二十四獄は、ここでは二十番目に「北酆二十四獄門下の獄」としてその一つに数えられている。「道教義枢」巻七によれば、泰山など五岳のそれぞれにもまた二十四獄があるとされており、この三十二獄がその内部でさらに多くの獄に分かれていると考えられる場合もあったので

ある。ちなみに言えば、この条の五岳は南岳を衡山だとしており、江南に起源する原始霊宝経系統の南岳を霍山だとするものとは異なった伝承の上にある。

この三十二獄の列挙は「趙文和伝」に出るとされている。文和は、趙泰の字で、かれは地獄巡りの物語りの主人公として知られる。恐らくここに挙げられた三十二獄の名も、もともと趙文和が経巡った冥府として一つに纏められたものであろう。この趙文和を主人公とするものなど、魏晋南北朝期に多数記録されている地獄巡りの物語りについては、別の機会に纏めて考察を加えたい。

以上に引いた、「三洞珠嚢」に見える二十四獄と三十二獄とについては、ともにその名を列挙するだけの、いわば静的な記述であった。それでは、こうした獄やそれと一つになっている冥界の官僚組織が人間たちの善悪の行為にたいしてどのように機能するのかという、いわば冥界の動的な面を窺うため、次に「元始五老赤書玉篇真文天書経」を一例として挙げてみよう[26]。

元始霊宝西南天の大聖衆・至真の尊神たる無極大道天皇老人・南極元真君・洞陽太霊君らは、常に毎月の二十四日のひに、天の高みにある霊宝太玄都の朱宮に会合し、三官・九府・五岳・北酆・泰山二十四獄の記録の細目や鬼神と天人とに課せられる罰としての労役の軽重について、協議し検討を加える。この日、北辰に勅命を出し、地上に降って三官の考召や北部（北酆？）の刺姦の役の者らとともに天下を経巡って、もろもろの役所を巡察し、かねて万民たちの善行悪行について朱宮に上言させる。この日に霊宝の真経を習い、香を焚いて道を修し、斎を守り定めを犯さぬ者がおれば、北辰はその善行を書き連ねて上言し、上宮はその者の名を記録し、罪録からは名前が削られ、種民（選ばれた者）となることができる。もし科（おきて）に違い律を犯す者があれば、長く鬼役に充てられ、三塗や五苦の中に淪むことは免れられない。

同様の、月の二十四日には〝罪刑の薄書〟の考校があるとの記述は、「無上秘要」巻二二の朱宮についての説明の中にも見られる。このような日であるので、道教信者たちは月の二十四日には特に身を慎まねばならないと

されているのである。

ちなみに道教（あるいは民間信仰と言う方がよいかもしれない）では、男と女とは別々の地獄に収監されるともされている。女性の地獄は女青と呼ばれる。女青の獄については、小説的な資料ではあるが、顔之推「冤魂志」に述べるところが参考になる。それは次のような物語りである。晋の時代、富春県令の王範がその妾の桃英の讒言を真に受けて、部下の孫元弼を殺した。陳超も孫元弼の殺害をそそのかすようなことを言った。その後、王範は都にもどった。[27]

陳超も都に出て王範に会いに行こうとした。赤亭山の下までやって来たとき、雷雨に遭い日も暮れた。突然、陳超の腋をかかえて人気のない水沢の中につれこんだ者がいた。いなびかりが照らし、見ればそれは一人の鬼（亡者）であって、顔はひどく黒ずみ、目には瞳がなかった。鬼が言った、「おれは孫元弼なのだ。天の神に訴えて、怨みをはらすことを許された。久しくおまえを待っていたが、今やっと会うことができた。」陳超は頭を地に打ちつけて血を流しながら〔謝罪をした〕。鬼が言った、「王範が首謀者であるから、まずきゃつを殺さねばならぬ。賈景伯（賈逵？）と孫文度（孫堅）とが太山の玄堂のもとにあって、二人して死生の名録をつかさどっている。〔王範はそこに連れて行かれよう〕。桃英の魂魄も女青亭に収監されよう。女青亭とは第三の地獄の名で、黄泉の下にあって、もっぱら女鬼をとりしきっているのだ。」

夜が明けると、鬼はどこかへ行ってしまった。

このように男性は太山の玄堂にある〝死生の名録〟によって寿命が定められ、恐らくはその死後、そこで裁きを受けるとされていたであろうのに対し、女性の魂魄は女青亭なる地獄に収監されるのである。鬼の言葉に、女青亭は第三の地獄だと説明されているが、これがその背後にいかなる地獄体系を持っていたのかは明らかでない。[28]

以上にいくつかの道教の地獄の体系の例を挙げてみた。しかしこれ以外にも、道教の経典や戒律の中にはまだまだ多くの冥府が出現する。前に引用した「真誥」巻

十五の羅酆山の説明の部分に付けられた注者の言葉に「地獄にいたりては、所在に尽く有り」とあるように、実に様々な地獄があり、しかも種々の地獄の体系の間には相互に矛盾と不統一とがあって、道教の冥府全体を纏める、より大きな体系があったわけではない。前にも述べたように、当時の一般の人々の道教信仰にとって、死者の魂が地獄で苦しんでいる（そうしてそれが罪多い自分自身の将来の運命である）という観念はきわめて重いものであったにしても、その地獄の内部構造を詳細に、またペダンチックに体系づけることにはあまり興味がなかった。それは逆に言えば、死者の救済への希求が真摯であって、地獄の数合わせなどする精神的余裕はなかったのだ、とも言えよう。地獄の体系化は職業的な宗教者によって行なわれたものであろう。

これまでは罪によって地獄へ淪んだ死者（特に祖先の霊魂）の救済という視点を中心にして道教の地獄を見てきたのであるが、それでは得道をめざす道教修行者自身は、地獄とどのように関わっていたのであろう。道教修行者と地獄との関係について、ごく単純化して言えば、道教徒たちは修行を積むことによって、その死後には地獄を経過することなく、直接に天に昇ることができるとされたのである。「洞真青要紫書金根経」には次のように言う。[29]

〔朱書した「三天太上召伏蛟竜虎豹山精文」を〕別室に安置し、左右に香を焚いて、心をこめて供養をし、受けて身に帯びれば、天下の神霊たちは、自から名をなのってその門を訪れ、五帝の玉童と玉女とが十二人づつ遣わされ、外出をする際には、五帝が侍衛し、三界の役所が出迎える。死んだあと、もう三悪（三悪道？）の苦難を受けることもなく、泰山を経ず、ただちに九天に昇り、衣服は自然に給され、位は太極に同じく、やがては必ず仙となる。

このように道教の修行を積めば、一般の人には避けることができない三悪や泰山を経ずに、直接に天に昇れるのである。それに加え、中国では地獄や天上世界においても文書行政が徹底していて、修行を積んだ者は、地獄にある名簿からその名が削られ、代わって天上に名前が

登録されるとされている。そうなってはじめて地獄からの召喚を免れることができるのである。「上清洞真智慧観身大戒文」に言う。[30]

太極真人が言う……よくこの戒を奉ずる者は、たやすく太上の大法師として、三宝の宗となることができる。そのとき十方の神々の全ては、おまえを雲漢（あまのがわ）において敬し、群仙たちはおまえを東華に案内して、いながらにして天魔たちを召し寄せることができるようになる。魔王がその信徒の符命を三界六天に推挙し、泉曲の府（黄泉の役所）や泰山主者や地官のもとにあって、死すべき者の録籍の中から〔その者の名が〕もう無くなり、青宮において仙人の名簿の中にその名がはっきりと書きこまれる。やがて必ずや玉京の高仙、太上の真人となること間違いないのである。

しかしまた、道教修行者たちにとって地獄が全く無縁であったわけではない。修行を怠るとき、かれらにも地獄が待っていた。特に道教の経典を粗末に扱えば、修行者はその先祖をも含めて地獄に落ちるであろうと、しばしば戒められている。「洞真四極明科」に言う。[31]

道室に入って経を誦する際には、文句は前後一続きに誦し、天音（すなわち経典の文句）をとばしたり略したりしてはならない。一句を読みそこねたら、百字分もとに戻って読み直す。二句を読みそこねたら、二百字分もとに戻る。五句を読みそこねたら、五百字分もとに戻る。出だしから一句を誦しそこねたら、ただちに一篇全体を誦してこれを補う。十度から三十度までこうした失敗をしたら、功徳は失われ修行も打ち切られて、仙と成ることができない。五十度から百度まで失敗をすれば、その罰は七祖に及び、修行者自身も合わせて、左右の官の拷罰、刀山火食、二十四獄、三塗の役に充てられる。

また妄りに経典伝授を行なった場合も同様である。「上清洞真智慧観身大戒文」に言う。[32]

太微天帝君が言った……伝授を受けた者は九百年に一人だけ口授することができる。一人を越えてはならない。もし一人を越えて伝授をしたならば、それは戒を漏らしたものとされ、戒を漏らせば、罪は

七祖の父母にまで及んで、地獄に閉じ込められ、修行者自身も三塗・五苦・八難を経めぐって、劫が終わるときにもまたもとに戻り、〔永久に〕悪道の中を転輪し、仙からは日々に遠ざかり、怨みを持つ者や負い目を持つ者と、ことあるごとに会うことになる。各々心して行動せねばならぬ。

以上にいくつか例を挙げつつ述べてきたように、当時、魏晋南北朝から隋唐にかけての時期の道教信仰にとって、死者の救済と自からの修行との両面において、地獄の存在は大きな意味をもっていた。さらに道教信仰にとってより根本的な問題として、道教徒が俗人と入道者を区別する場合、入道者のほうを冥府に属するものと位置づけていたらしいことに注目すべきであろう。たとえば三張道教では、一般の道教信者は〝鬼卒〟と呼ばれていた。あるいはまた古い戒律書に「女青鬼律」があるが、この命名もまた道教信者が宗教的な組織と観念の中で〝鬼〟と位置づけられていたであろうことを示唆する。

聖と俗とを厳密に区分し、その区分に大きな意味を与えることが、宗教にとって不可欠な、根本的な要素の一つであろう。宗教者たちは、俗的な原理から自からを峻別することによって、独自の価値観を築くのである。道教においても、信徒たちは自からを俗的な世界の外に置くことが求められている。「玄都律文」に次のように言う。[33]

律にいう、道官・女官・祭酒・籙生たちよ、法誡に自からをゆだねし者は、死ぬる時には靖宇や観治（道教の教会や儀礼のための建物）において死ぬべきであって、俗人の舎宅において死んではならない。その魂が汚れた地におるのであれば、天・地・水の三官はそれを許さず、屍はむち打ちを受け、〔冥府の〕河川工事に送られて三年間の労役に服することになる。

この律文では、道教徒は特に死に臨む時、俗人と隔離された場所におらねばならないとされており、人生の中でも最も重要な場面において、聖俗の区別を厳格に守ることが求められているのである。そうして、その聖俗の区別の中で、道教徒は自からを〝鬼〟であるとし、死に近い者、地獄に近い者と位置づけていた。なぜ自からを〝生〟に近い者とせず、〝死〟に近い者としたのであろうか。（神

仙思想の場合であれば、おそらく修行者は自からを俗人よりも〝生〟に近い者と位置づけていたであろう）。それは、道教信仰にとって〝死〟が単に終わりであるのではなく、むしろ一つの重要な救済への道だと考えられたことに由来するであろう。罪多い一般の人々は、現世的な努力によってだけではとても救われる見込はない。ただ死を経過することによってその救済の可能性が出てくると考えられたのである。

道教の地獄を仏教の地獄と比較すると時、仏教のそれがいささかマゾヒスティクに、いかに人間を苦しめるかに心を注いで記述されているように見えるのに対して、道教では地獄からの脱出ための方法とその過程とが常に関心の中心になっていることに気づくであろう。前に述べたように、一旦、地獄に落ちた者が〝錬形〟のために昇る南宮が準備されており、あるいは真人たちは自からの仙階を高めるためにわざわざ冥府に入るとされているのである。死や冥府は、罪をそそぎ自からを高める場所なのであった。仏教の地獄の観念の影響を受けつつも、このような独自の地獄を作りあげたことの背景には、この時代の人々の自からの罪にたいする凝視とその罪からの解放への強い希求とがあったにちがいない。

注

（1）「道教義枢」（縮景本道蔵第41冊）巻二、第二十紙。以下、道教経典の葉数は全て道蔵本による。
済度者、依経有三籙七品。三籙者、一者金籙斎、上消天災、保鎮帝王。二者玉籙斎、救度人民、請福謝過。三者黄籙斎、下拔地獄九玄之苦。七品者、一者三皇斎、求仙保国。……五者塗炭斎、悔過請命。六者明真斎、拔九幽之魂。七者三元斎、謝三官之罪。

（2）「無上秘要」（縮道蔵第42冊）巻五四、第六紙。
第一上香、為同法某甲、拔度九祖父母九幽玉匱長夜之府、死魂悪対、宿身罪根、功徳開度。建斎焼香、請謝十方、願為九祖父母、拔出幽苦、上昇天堂。今故焼香、帰身帰神帰命大道。臣等首体投地、帰命太上三尊、願以是功徳、帰流九祖父母、乞得免離十苦八難長夜之身、得見光明、上昇天堂、衣食自然、長居無為。今故焼香、自帰師尊大聖衆至真之徳。得道之後、昇入無形、与道合真。

（3）「無上秘要」巻五四、第八紙。
同法某甲九祖父母、生世之日、所行元悪、罪結九幽長夜之府、魂充考撻、諸痛備嬰、形体（骸）毀悴、苦毒難任、長淪万劫、終天無解。今依盟真玉匱女青上宮拔度科品、齋青紋之繒九十尺、或九尺、金竜一枚、帰命東方無極太

上霊宝天尊、九気天君、東郷諸霊官。拔贖某家九祖父母悪対罪根、三界同（司）算、女青上宮、削除罪録、開度窮魂、身入光明、上昇天堂、衣食自然、早得更生慶福之門。甲得道、真与神合同。

（4）「洞玄霊宝長夜之府九幽玉匱明真科」（縮道蔵第57冊）第八紙。
明真科曰、無極世界男女之人、生世身行、不念為善、動為悪根、攻伐師主、讒撃善人、殺害無道、不念衆生、酷虐為行、陰懐謀逆、嫉妬勝己、抑絶賢明、死受悪対、拘閉罪魂、径入地獄長夜之中、諸痛備加、苦毒難勝、万劫当還、生非人之道、永失福門、長淪罪塗、往返無窮、不得開度、億劫無縁。

（5）「九幽玉匱明真科」第十七紙。
常以正月三月五月七月九月十一月一年六月、月一日八日十四日十五日十八日二十三日二十四日二十八日二十九日三十日一月合十日、及八節日、甲子日、庚申日、於家中庭安一長燈、令高九尺、於一燈上然九燈、毎令光明、上照九玄諸天福堂、下照九地無極世界長夜之中、依威儀具法。開啓上請天仙地仙真人飛仙、日月星宿、九宮五帝、五嶽三河四海兵馬、各九億万騎、三十二天監斎直事、侍香金童、散花玉女、五帝直符、各三十二人、伝言奏事飛竜騎吏等、一合来下、監臨斎堂、捻香願念、応口上徹。行道事竟、皆還天宮。晝則焼香、夜則然燈、使香煙不絶息。露経中庭、於九燈之下、繞燈行道。上香願念、畢、次向東九拝、言、某甲今皈命東方無極太上霊宝天尊、已得道大聖衆、至真諸君、丈人、九気天君、東郷諸霊官、今故立斎、焼香然燈。願以是功徳、照曜諸天、普為帝王国主、君官吏民、受道法師、父母尊親、同学門人、隠居山林学真道士、諸賢者、蠢飛蠕動、蛟行蜎息、一切衆生、普為免度十苦八難、長居無為、普度自然。某家億曽万祖、囚徒先魂、開諸光明、咸得解脱、転入信根、去離五道、開度因縁、死者長楽、生世蒙恩、天下太平、道徳興隆。今故焼香、自皈依師尊、大聖衆、至真之徳。得道之後、昇入無形、与道合真。畢、脱巾、叩頭自搏、各八十一過、止。

（6）塗炭の礼については、「無上秘要」巻五〇の塗炭斎品に詳しい。「謹相携率、為承天師旨教、建義塗炭、露身中壇、束骸自縛、散髪泥額、懸頭銜髪於欄格之下、依霊宝下元大謝清斎焼香、稽顙乞恩」などと、一連の〝斎〟の中でも苦行的様相の濃いものである。アンリ・マスペロ『道教――不死の探究』川勝義雄訳、東海大学出版社（のちに、平凡社東洋文庫三二九）を参照。

（7）「九幽玉匱明真科」第三〇紙。
天地否激、陰陽相刑、四時失和、災害流生、星宿錯綜、以告不祥、国土擾乱、兵病並行、帝王憂傷、兆民無寧。謹依大法、披露真文、皈命東方無極太上霊宝天尊、已得道大聖衆、至真諸君、丈人、九気天君、東郷諸霊官。令（今）故立斎、披心露形、引求自剋、為国謝殃、焼香然燈、照曜諸天、下暎無極長夜之中、九幽之府、開諸光明。願以是功徳、爲帝王国主、君官吏民、解災却患、三景復

位、五行順常、兵止病愈、国祚興隆、兆民懽泰、人神安寧。今故焼香、皈身皈神皈命師尊、大聖衆、至真之徳、得道之後、昇入無形、与道合真。

（8）比丘恵感弥勒造像記（竜門石刻録、水野清一『竜門石窟の研究』所収）
景明三年五月卅日、比丘恵感、為亡父母、敬造弥勒像一区。願国祚永隆、三宝弥顕、曠劫師僧父母眷属、与三塗永乖、福鍾競集、三有群生、咸同此願。

（9）たとえば「太平経」巻一一四（合校本五九八頁）に「悪行之人、不可久視天地日月星辰、故蔵之地下、不得善鬼同其楽、故分別也。」とあって、善鬼（善い死者）と区別し、悪行の者だけ地下にとじこめられるとあるのは、生前の所行の応報として悪人が地下におとされるという観念を、プリミティブな形で伝えている。

（10）孟阿妃造像記
大斉武平七年歳次丁酉、二月甲辰朔、廿三日丙寅、清信弟子孟阿妃敬為忘夫朱元洪、及息子敖、息子推、息白石、息康奴、息女夏姫等、敬造老君像一区、今得成就。願亡者共離三塗、永超八難、上昇天堂、侍為道君。芒芒三界、蠢蠢四生、同出苦門、俱昇上道。
ちなみにこの文中に「亡夫」と書くべき所を「忘夫」と書いているが、同様の例は、例えば「隆緒元年（七二七年）王阿善造像記」（文物一九六一―一）にも「忘夫馮阿樹、忘息馮義顕」と見える。

（11）「霊宝白帝七気天文」（文物参考資料一九五八―一〇）西方七気素天、承元始符命、告下西方無極世界土府神郷諸霊官。今有清源県主、滅度五仙、托尸太陰。今于咸寧県洪源郷少陵原、安宮立室、庇形后土。明承正法、安慰撫恤、素霊哺飴七気素華、精光充溢、練飾形骸、骨芳肉香、億劫不滅。西嶽華山、明開長夜九幽之府、出清源県主魂神、沐浴冠帯、遷上天府、供給衣食、長在光明、魔無干犯、一切神霊、侍衛安鎮。如元始明真旧典女青文。

（12）「太上洞玄霊宝滅度五錬生尸妙経」（縮道蔵第10冊）第七紙。
東方九気青天、承元始符命、告下東方無極世界土府神郷諸霊官……悉如元始盟真旧典女青文。黒書此文於青石上。師拝黄繒章、畢、埋文於亡者尸形所在、東郷極墓界。臨埋時、師雲行禹歩九歩、至所在、東向読大字及文。畢、叩歯二十四通、嗤気九過、呪曰、元始符命、普告東方無極世界土府神郷、洞空、洞無、洞玄、洞元、九気総司、三界神官、一切冥霊、無極神王。今日大慶、青天始陽、高駕臨正、万道開通。甲乙受度、託尸玄房。太上清信魂応上升五仙、沐浴払飾衣裳、形庇霊嶽、地為開張。請以玉女安鎮神宮、一切侍衛、供給自然、須魂反尸、上帝奉迎。一如明真旧典施行。畢、便埋文土中也。

（13）たとえば、六朝期には成立していたと考えられる「洞真上清関天三図七星移度経」（縮道蔵第55冊）には、南仙、南軒、南極、南陽之宮、南宮などの名称が用いられており、たとえばその上巻では、「願わくは我が為に七星に移度して、鬼門を塡塞し、死気を断截して、天関を披朗

し、北斗を玄枢に廻らせて、生気を西坤に度し、北帝に酆都に離れて、名を南軒に記さるるを得んことを」などとあるように、南の生は常に酆都（北）の死と対にされている。付け加えれば、この経が「七星移度経」と呼ばれ、また経文中に南斗も出現するように、ここに見える南北の対は、南斗が生を司り、北斗が死を司るという観念とも結びついていた。たとえば「搜神記」巻三の管輅の条に「南斗注生、北斗注死」とある。

（14）「無上秘要」巻五〇、第十二紙。
願以是功徳、為某家億曽万祖父母、先亡後死、亡父母等、免脱憂苦、上昇天堂、分福南宮、帰身帰神帰命大道。

（15）「霊宝無上度人上品妙経」（縮道蔵第1冊）巻一、第四紙と第十四紙。
道言……上学之士、修誦是経、皆即受度、飛昇南宮。道言、夫末学道浅、或仙品未充、運応滅度、身経太陰。臨過之時、同学至人、為其行香誦経十過、以度尸形如法、魂神逕上南宮、随其学功、計日而得更生、轉輪不滅、便得神仙。

（16）「無上秘要」巻三九、第七紙。
某甲身奉大法、佩帯天文……七祖同福、皆得上昇、逍遥玄都七宝林中、魂受錬度、時得更生。

（17）「無上秘要」巻四九、第十四紙、「三皇斎立成儀」を引く。
仰願皇君上帝、至聖火神、天真衆霊、領校仙官、賜各告下群司、檄命職宰、咸聴察臣等啓奏、使遷拔某家七祖父母及余親族亡魂苦爽、並乞解脱牢檻、原放徒繫、休息謫役、克離衆罰、使各得還居福堂、優遊閑楽、佑利子孫、不興詞訟、年満限畢、更生人中富貴之家、永保懽泰。

（18）「老子想爾注」〝没身不殆〟注、饒宗頤「敦煌六朝写本張天師道陵注老子想爾注校牋」一九五六年、香港、を参照。
太陰道積練形之宮也。世不可処、賢人避去、託死過太陰中、而復一辺生。像没而不殆也。俗人不能積善行、死便真死、属地官去也。
同様の注は〝死而不亡者寿〟の句にも付けられている。

（19）「無上秘要」巻八七、第十紙（「真誥」巻四、第十六紙にもほぼ同様の記述が見える）
若其人或蹔死而適太陰、権過三官者、肉既灰爛、血沈脉散者、而猶五蔵自生、白骨如玉、七魄営侍、三魂守宅、三元歓息、大神内閉、太一録神、司命秉節、五老扶華、帝君宝質。或三十年二十年、或十年五年、随意而出。当生之時、即更収血育肉、生津結液、復質反胎、成形濯質、乃勝於昔未死之容也。真人練身於太陰、易貌於三官者、此之謂也。

（20）「三洞珠嚢」（縮道蔵第42冊）巻七、第十六紙。
按太真科中巻云、宛利天下酆都之山、在北方癸地。山上有八地獄、主上三官。第一監天獄……第八元正獄。中央有八地獄、主中三官。第一玄沙北獄……第八清冷獄。山下有八地獄、主下三官。第一無量獄……第八女真獄。右二十四獄、獄有十二掾吏、金頭鉄面巨天力士各二千四百人、把金槌鉄杖、玄科死魂、以治罪罰也。

ちなみに言えば、二十四を成数とするのは、二十四治の教会組織などで知られるように、天師道系統の道流であろうか。

(21) 「抱朴子」内篇対俗第三に、「勢可以総摂羅酆、威可以叱咤梁成」とあり、梁成については、「御覧」八三三に引く王隠「晋書」に「鬼之聖者梁成、賢者呉季子」とある。対句の関係から見て、羅酆も鬼の世界と考えられていたのであろう。「真誥」巻十五には、頃梁城の「酆宮誦」が引かれている。

(22) 「真誥」(縮道蔵第34冊)巻十五、第一紙以下。
羅酆山在北方癸地。山高二千六百里、周廻三万里。其山下有洞天、在山之周廻一万五千里。其上其下並有鬼神宮室。山上有六宮、洞中有六宮、輒周廻千里。是為六天鬼神之宮也。山上為外宮、洞中為内宮、制度等耳。第一宮、名為紂絶陰天宮。以次東行。第二宮、名為泰煞諒事宗天宮。第三宮、名為明晨耐犯武城天宮。第四宮、名為恬昭罪気天宮。第五宮、名為宗霊七非天宮。第六宮、名為敢司連宛廈天宮。凡六天宮、是為鬼神六天之治也。洞中六天宮、亦同名。相像如一也。……人初死、皆先詣紂絶陰天宮中受事。或有先詣名山及泰山江河者、不必便径先詣第一天。要受事之日、罪考吉凶之日、当来詣此第一天宮耳。泰煞諒事宗天宮諸煞鬼、是第二天也。卒死暴亡、又経於此。賢人聖人去世、先経明晨第三天宮受事。禍福吉凶、続命罪害、由恬昭第四天宮。鬼官地斗君治此中。鬼官之北斗。

(23) 「真誥」巻十六、第十紙。
夫至忠至孝之人既終、皆受書為地下主者。一百四十年乃得受下仙之教、授以大道。従此漸進、得補仙官。一百四十年聴一試進也。

(24) 一九六八年、法蔵館。なお「民間文学」一九八三年一期にも、酆都の伝説三篇が収められている。

(25) 「三洞珠嚢」巻七、第三四紙。原文の引用は省略。

(26) 「元始五老赤書玉篇真文天書経」(縮道蔵第2冊)巻下、第四紙。
元始霊宝西南〔天〕大聖衆、至真尊神無極大道天皇老人、南極元真君、洞陽太霊君、常以月二十四日、上会霊宝太玄都玉京朱宮、共集考校三官九府五嶽北酆泰山二十四獄罪刑簿目、鬼神天人責役軽重之事。其日敕北辰、下与三官考召北部刺姦、周行天下、覆校諸司。兼〔廉〕察万民善悪、列言朱宮。其日有修奉霊宝真経、焼香行道、執斎持法、則北辰列言善功、上宮記名、削除罪録、得為種民。有違科律、則長充鬼役、不免三塗五苦之中。
なおこの一段は、「無上秘要」巻九、第七紙に「洞玄元始五老赤書玉篇経」の文として引用されている。南北朝期にすでにあった道典であることは確かである。

(27) 顔之推「冤魂志」(宝顔堂秘笈一巻本「還冤志」)
超亦出都看範。行至赤亭山下、値雷雨日暮。忽然有人扶超腋、径曳将去、入荒沢中。電光照、見一鬼、面甚青黒、眼無瞳子。曰、吾孫元弼也。訴怨皇天、早得申理。連時候汝、乃今相遇。超叩頭流血。鬼曰、王範既為事主、当先殺之。賈景伯、孫文度在太山玄堂下、共定死生名録。桃英魂魄亦収在女青亭。〔女青亭〕者、是第三地獄名。在黄泉下、専治女鬼。投至天明、失鬼所在。

(28) 「酉陽雑俎」前集巻二、玉格篇に、「三十六獄、流沙赤等号、溟滓獄、北岳獄也。又二十四獄、有九平、元正、女青、河北等号」とある。女青獄はその発音から女真獄(八〇頁)に通じたのであろうか。

(29) 「無上秘要」巻四一、第六紙所引「洞真青要紫書金根経」
……著別室、焼香左右、精心供養、受以佩身、天下神霊、奏名朝門、給五帝玉童玉女各一十二人、出入遊行、五帝侍衛、三界司迎。生死無復三悪之難、不経泰山、逕昇九天、衣飲自然、位同太極、要自成仙。

(30) 「上清洞真智慧観身大戒文」(縮道蔵第56冊)第二二紙。
太極真人曰……能奉是者、便為太上大法師、三宝之宗焉。十方皆敬子於雲漢、群仙将引子於東華、坐召天魔。魔王拳兆符命於三界六天。泉曲之府、太山主者、地官、無復有応死之録籍也。青宮仙名乃定於是耳。将当為玉京之高仙、太上之真人焉。
この一段は「無上秘要」巻四五、第十七紙に「洞真智慧観身大戒経」として見える。

(31) 「無上秘要」巻四三、第五紙。
入室誦経、当令言句相属、不得越略天音。失一句、更却百言而読。失二句、却還二百言。失五句、却還五百言。始就誦失一句、便誦一篇而補之。十犯至三十犯、廃功断事、不得成仙。五十犯至百犯、延七祖己身、並被左右官考罰、刀山火食、二十四獄三塗之役。

(32) 「上清洞真智慧観身大戒文」第二十紙。
太微天帝君曰……受者九百年得口授一人。不得過一人。若過一人、是為洩戒。罪及七祖父母、幽厄地獄、身履三塗五苦八難。終劫復始、転輪悪道、去仙日遠、冤家債主、因時亦会。各慎身焉。

(33) 「玄都律文」(縮道蔵第5冊)第十七紙。
律曰、道士女官祭酒煞生、身任法誡、若死要在靖宇観治、不得在俗人舎宅。其魂神所居穢地、天地水三官不許、屍被考掠、作河三年徒役。

＊ この小論は、福永光司教授編『唐代の道教と仏教』所収予定の論文「道教の地獄」の第一章を成すものである。

(こみなみ　いちろう・京都大学人文科学研究所教授)